

セルフ・モニタリングが被服行動に及ぼす効果

池 田 善 英

本研究では被服行動の個人差を、自己呈示の観点から検討する。自己呈示に関連するパーソナリティとしてセルフ・モニタリングを取り上げ、被服行動に及ぼす効果を明らかにする。

神山(1996)は、人が被服を着装する動機を、2種類に大別した。一つは身体の状態を方向づける、有機体の生命維持や生命増進を目指した動機である。もう一つは心や行動の状態を方向づける、自己の顕示や社会への適応を目指した動機である。前者は生理的目的、後者は心理・社会的目的と言える。心理・社会的目的の中には、人が被服を着装するさい、被服によって他者に自己の印象を与え、その印象を管理することを含んでいる。そこで被服行動は自己呈示としても捉えられる。

永野(1994)は、個人が示す恒常的な被服行動の傾向を測定するため、被服行動尺度を構成した。被服行動尺度は4種類の下位尺度に分類される。流行性は、衣服の流行性に関する行動次元である。流行性の高い人ほど、流行情報に注意を向け、被服行動に流行を取り入れる。機能性は、衣服の機能性・快適性に関する行動次元である。機能性の高い人ほど、動き易さや着心地を重視する。適切性は、衣服の社会的な適切さに関する行動次元である。適切性の高い人ほど、状況にふさわしい被服を選択する。経済性は、衣服の経済性に関する行動次元である。経済性の高い人ほど、被服を購入するさい安価なものを選択する。

ここで4種類の下位尺度は、その目的によって分類できる。流行性と適切性とは、自己を社会の一員として捉え、自己を他者に示し、他者から受容されることを意図して、被服を選択することと考えられる。心理・社会的目的に基づいた被服行動を示している。流行性と機能性は、自己呈示と正の関連があるだろう。

これに対して機能性は、被服を選択するさい、着装者が快適さを求めることと考えられる。生理的目的に基づいた被服行動を示している。機能性は自己呈示と関連がないだろう。また被服選択の条件として、経済性すなわち価格の低さを求めれば、装うことには制約となる。心理・社会的目的を重視できなくなる。経済性は自己呈示と負の関連があるだろう。

自己呈示と関連のあるパーソナリティとして、セルフ・モニタリング self-monitoring が挙げられる。セルフ・モニタリングとは、社会的な状況や人間関係の中で、自己を観察・規制・コントロールすることであり、その程度には個人差がある。スナイダー(1998)によれば、セルフ・モニタリング傾向の高い人はアイデンティティを、具体的な社会状況とそれに対応する役割に、求めている。柔軟性があり、周囲に合わせて自己を変える。セルフ・モニタリング傾向の低い人のアイデンティティは、ただ一つで、どのような状況でも変わらない。一貫性があり、性格や考えを行動に反映する。そこでセルフ・モニタリング傾向の高い人ほど、自己呈示に関連した被服行動にも積極的であるとえられる。

これらより以下の予測を行った。第1にセルフ・モニタリング傾向の高い人ほど、流行性が高いだろう。第2にセルフ・モニタリングと機能性との間には、関係は見受けられないだろう。第3にセルフ・モニタリング傾向の高い人ほど、適切性が高いだろう。第4にセルフ・モニタリング傾向

の高い人ほど、経済性が低いだろう。

本研究では、被服行動の指標として、被服費を加える。セルフ・モニタリング傾向の高い人ほど、被服行動を積極的に行うと考えられる。被服を積極的に購入すれば、被服費は増大する。そこで第5の予測は次のようになる。セルフ・モニタリング傾向の高い人ほど、被服費が多いだろう。

なお永野（1994）ではいずれの下位尺度にも、性別による有意差が認められた。流行性・機能性・適切性の下位尺度得点は、女性が男性より高かった。経済性の下位尺度得点は、男性が女性より高かった。そこで統計処理において、性別を要因に組み入れる。

方 法

実験計画

実験計画は、セルフ・モニタリング(高・低)×性別(男性・女性)の、2要因計画である。いずれも被験者間変数である。

被験者と手続き

被験者は、埼玉県内にある私立4年制大学の、学生198名（男性78名、女性118名、不明2名）である。2004年7月に、“社会心理学概論”の授業時間の一部を用いて、集団実施した。

セルフ・モニタリング

セルフ・モニタリングの測定には、岩淵・田中・中里（1982）のセルフ・モニタリング尺度を使用した。この尺度はSnyder（1974）が作成した尺度の日本語版である。回答方法は“全くそう思わない”（1点）から“非常にそう思う”（5点）までの5件法である。全25項目からなる。逆転項目は項目番号1, 2, 4, 9, 12, 14, 17, 20, 21, 22, 23の11項目である。全項目の得点を合計し、セルフ・モニタリング尺度得点とする。

被服行動

被服行動の測定には、永野（1994）の被服行動尺度を使用した。回答方法は“全くあてはまらない”（1点）から“非常によくあてはまる”（7点）までの7件法である。全20項目からなる。

被服行動尺度は4種類の下位尺度からなる。被験者が下位尺度の内容を察知しにくいよう、項目の配列を以下のように改変した。流行性尺度は、項目番号1, 5, 9, 13, 17の5項目である。機能性尺度は項目番号2, 6, 10, 14, 18の5項目である。適切性尺度は項目番号3, 7, 11, 15, 19の5項目である。経済性尺度は項目番号4, 8, 12, 16, 20の5項目である。逆転項目は項目番号12の1項目である。各下位尺度の項目の得点を合計し、各下位尺度の得点とする。

被服費

被服費の測定には、以下の項目を使用した。“あなたは服装や小物に、1ヶ月あたりいくら費やしていますか。”回答方法は実際に使用している金額（円/月）を記述させた。

表 1 被服行動尺度の下位尺度得点の平均値（標準偏差）

セルフ・モニタリング	被服行動			
	流行性	機能性	適切性	経済性
高群 (N=85)	18.86 (6.579)	19.67 (4.182)	24.75 (4.683)	17.01 (5.096)
低群 (N=87)	14.52 (6.651)	20.59 (4.855)	24.78 (4.654)	18.60 (4.627)
全体 (N=172)	16.66 (6.946)	20.13 (4.545)	24.77 (4.683)	17.81 (4.915)

表 2 男性被験者における被服行動尺度の下位尺度得点の平均値（標準偏差）

セルフ・モニタリング	被服行動			
	流行性	機能性	適切性	経済性
高群 (N=35)	16.69 (6.760)	20.26 (4.025)	24.46 (4.798)	16.77 (6.102)
低群 (N=33)	10.61 (5.701)	20.88 (5.407)	23.27 (5.287)	19.12 (4.973)
男性全体 (N=68)	13.74 (6.934)	20.56 (4.720)	23.88 (5.039)	17.91 (5.667)

表 3 女性被験者における被服行動尺度の下位尺度得点の平均値（標準偏差）

セルフ・モニタリング	被服行動			
	流行性	機能性	適切性	経済性
高群 (N=50)	20.38 (6.064)	19.26 (4.280)	24.96 (4.738)	17.18 (4.313)
低群 (N=54)	16.91 (6.067)	20.41 (4.529)	25.70 (3.998)	18.28 (4.419)
女性全体 (N=104)	18.58 (6.282)	19.86 (4.427)	25.35 (4.364)	17.75 (4.382)

結 果

尺度の特性

セルフ・モニタリング尺度、性別、被服行動尺度のいずれかに、回答に不備のある被験者26名（男性10名、女性14名、不明2名）を、分析から除外した。残りの被験者172名（男性68名、女性104名）を分析の対象とした。

セルフ・モニタリング尺度の内部一貫性を確認するため、Cronbachの α 係数を算出した。 $\alpha = .715$ であった。セルフ・モニタリング尺度の内部一貫性は十分に高いと言える。被服行動尺度の下位尺度の内部一貫性を確認するため、Cronbachの α 係数を算出した。流行性は $\alpha = .881$ 、機能性は $\alpha = .733$ 、経済性は $\alpha = .621$ 、適切性は $\alpha = .614$ であった。項目数が5項目と少ないことを考慮すると、各下位尺度の内部一貫性は十分に高いと言える。

そこでセルフ・モニタリング25項目の合計点を算出し、セルフ・モニタリング得点とした。セルフ・モニタリング得点が77点以上の85名を高群とし、セルフ・モニタリング得点が76点以下の87名を低群とした。

被服行動

各下位尺度の平均値と標準偏差とを、表1・表2・表3に示す。セルフ・モニタリングと性別とを独立変数とし、被服行動尺度の各下位尺度得点を従属変数とする、2要因分散分析を行った。

流行性 セルフ・モニタリングの有意な主効果が認められた ($F(1,168) = 24.830, p < .001$)。高群 ($M = 18.86$) は低群 ($M = 14.52$) より、流行性得点が高かった ($t(170) = 4.303, p < .001$)。性別の有意な主効果が認められた ($F(1,168) = 4.742, p < .001$)。女性 ($M = 18.58$) は男性 ($M =$

13.74) より、流行性得点が高かった ($t(170)=4.742, p<.001$)。そのほかに有意な効果は認められなかった。

機能性 有意な効果は認められなかった。

適切性 性別の有意な主効果が認められた ($F(1,168)=4.097, p<.05$)。女性 ($M=25.35$) は男性 ($M=23.88$) より、適切性得点が高かった ($t(170)=2.022, p<.05$)。そのほかに有意な効果は認められなかった。

経済性 セルフ・モニタリングの有意な主効果が認められた ($F(1,168)=5.121, p<.05$)。低群 ($M=18.60$) は高群 ($M=17.01$) より、経済性得点が高かった ($t(170)=2.138, p<.05$)。そのほかに有意な効果は認められなかった。

被服費

セルフ・モニタリング尺度、性別、被服費のいずれかに、回答に不備のある被験者34名(男性19名、女性13名、不明2名)を、分析から除外した。残りの被験者164名(男性59名、女性105名)を分析の対象とする。

セルフ・モニタリングとの関係 セルフ・モニタリングと被服費との関係を検討するため、Spearmanの順位相関係数を算出した。有意な正の相関が認められた ($\rho=.162, p<.05$)。

性別との関係 性別と被服費との関係を検討するため、Mann-WhitneyのU検定を行った。女性 ($Me=10000$) は男性 ($Me=6500$) より、被服費が有意に高かった ($U=2459, p<.05$)。

被服行動と被服費との関係

被服行動尺度の各下位尺度と被服費との関係を検討するため、Spearmanの順位相関係数を算出した。被服費は流行性得点との間に、有意な正の相関が認められた ($\rho=.441, p<.001$)。被服費は経済性得点との間に、有意な負の相関が認められた ($\rho=-.461, p<.001$)。そのほかに有意な相関は認められなかった。

考 察

セルフ・モニタリングと被服行動との関係

流行性 予測通り、セルフ・モニタリング傾向の高い人ほど、流行性が高かった。セルフ・モニタリング傾向の高い人は、状況に合わせて自己を選ぶ。具体的な社会状況の中で、それに対応する役割に沿って、自己を規定する。そこで社会において流行している服装に、敏感であったと考えられる。

機能性 予測通り、セルフ・モニタリングと機能性との間には、明確な関係は認められなかった。機能性は自己呈示とは無関係の事柄であると言える。

適切性 予測とは異なり、セルフ・モニタリング傾向と適切性との間には、明確な関係は認められなかった。得点を見ると、セルフ・モニタリングの高群は24.75点、低群は24.78点であった。理論上の中点は20点であり、高群・低群共に適切性は高いと言える。

セルフ・モニタリング傾向の高い人は、社会的な状況に合わせて自己を表出する。そのため適切性も高くなったと考えられる。

セルフ・モニタリング傾向の低い人は、個人の信条に従って自己を表出する。それにもかかわらず適切性が高かったのは、次のような理由が考えられる。ここで言う適切な被服とは、“その場に合った服装”(項目7)、“社会的にみてふさわしいもの”(項目19)である。すなわち適切性とは、社会の常識やマナーを尊重した被服行動である。

セルフ・モニタリング傾向の低い人は、自己の信条に従って行動する。社会規範は、多くの人々が、自己の内部に受け入れているものである。セルフ・モニタリング傾向の低い人のうち、被服に関する社会規範を内面化している人は、適切性が高くなっただろう。

また、セルフ・モニタリング傾向の低い人は、短期的に変動する状況には対応しようとしなない。しかし社会の常識やマナーを身につけることは、社会の人々から支持を得られる。また長期に渡って一貫した行動を取ることにつながる。長期的な観点から、社会への適応を図ろうとした結果、適切性が高くなったとも考えられる。これはセルフ・モニタリング傾向の低い人が、戦術的な自己呈示に関心が薄いとしても、戦略的な自己呈示については関心がある可能性を示唆している。このような解釈の妥当性については、改めて検討する必要がある。

経済性 予測通り、セルフ・モニタリング傾向の低い人ほど、経済性が高かった。セルフ・モニタリング傾向の低い人は、状況によらず、一貫した自己像を持っている。内部にある信条に沿って、自己を規定する。そこで被服による外見の装飾には関心が薄く、経済性を優先するのだろう。

被服費 予測通り、セルフ・モニタリング傾向の高い人ほど、1ヶ月あたりに実際に費やしている被服費が、高かった。上記の知見を行動レベルでも確認した。

性別と被服行動との関係

女性の方が、流行性が高かった。女性の方が、適切性が高かった。女性の方が、1ヶ月あたりに実際に費やしている被服費が、高かった。女性の方が被服への消費に対して、積極的であると考えられる。その際、流行を意識しているのだろう。また状況に合わせて服装を変えてもいるのだろう。すなわち女性の方が、自己呈示の一環として、被服行動をとらえている程度が強いと言える。

被服費と被服行動との関係

被服費は流行性の高い人ほど高かった。被服の消費に積極的な人は、流行にも関心が高いと考えられる。被服費と機能性の間には、明確な関係が認められなかった。また被服費と適切性との間にも、明確な関係は認められなかった。人々は自分の費やせる被服費の中で、機能性や適切性を考慮するのだろう。被服費は経済性の低い人ほど高かった。この結果は経済性の概念から、妥当なものと言える。

結論

本研究ではセルフ・モニタリングが、被服行動に及ぼす効果を検討した。大学生の被験者を対象に、セルフ・モニタリング尺度と被服行動尺度を実施した。その結果、セルフ・モニタリング尺度の高得点の人は、流行性が高く、経済性が低く、実際の被服費が高額であることが、明らかになった。被服は自己呈示の手段の一つである。セルフ・モニタリング傾向の高い人ほど、状況に応じて適切に自己呈示しようとする。そこで被服行動にも積極的であると考えられた。

引用文献

- 岩淵千明・田中國夫・中里浩明 1982 セルフ・モニタリング尺度に関する研究 心理学研究, 53, 54-57.
神山進 1996 被服心理学の動向 高木修(編) 被服と化粧の社会心理学 北大路書房 Pp.2-24.
永野光朗 1994 被服行動尺度の作成 繊維製品消費科学, 35-9, 468-473.
Snyder, M. 1974 Self-monitoring of expressive behaviour. *Journal of personality and social psychology*, 30, 526-537.
スナイダーM. 1998 カメレオン人間の性格 齋藤勇(監訳) 川島書店
(Snyder, M. 1986 *Public appearances private realities: The psychology of self-monitoring*. W.H. Freeman and company, New York, New York and Oxford.)